



令和4年度全国剣道指導者研修会（西日本ブロック・奈良県）

令和4年度全国剣道指導者研修会（主催＝日本武道館、全日本剣道連盟、全日本学校剣道連盟、後援＝スポーツ庁、奈良県教育委員会、奈良県剣道連盟、主管＝奈良県学校剣道連盟）は、11月18日から20日までの2泊3日、奈良県奈良市のロート奈良武道場（奈良中央武道場）において、講師9名、参加者41名が集って行われた。

本事業は、平成22年度から令和元年度までの10年間、全国9ブロックのうち、毎年5ブロックで実施され、全都道府県をまわり約3,000名の参加を得た。令和2年度から、全国を東西に分けた2ブロックで行う予定だったが、コロナ禍の影響を受け中止が続いたため、今回は3年ぶりの対面での開催で、2ブロック開催として、10月の東日本ブロックに続く開催となった。

■1日目（11月18日）

開講式では、はじめに主催者挨拶を和田健日本武道館振興課長が、「本研修会は3年ぶりとなります。1つでも多くものを持ち帰り、授業に取り入れていただければと思います」と述べ、続いて、網代忠宏全日本剣道連盟会長が、「本研修会は中学校武道必修化となる前から実施しております。本研修会を受け、より安心・安全な授業となるよう、地元に戻りましたら、ぜひ他の先生方にも伝達してください。3日間実りある研修会にしたいと思います。よろしくお願いたします」と述べた。

開講式終了後は、網代講師が教員生活50年の経験談を交え5つのタイプの成長・習得の仕方について

講話を行った。人の成長の仕方は様々であり、特に今できなくてもコツコツと努力を重ねて後々実力が上昇する掉尾型の成長があることから、直ぐにできなくても叱らずに見守ることを説いた。最後に、「先生は子供たちの教育の環境を整える存在である、ということを肝に銘じていただきたい」と締めくくった。



続く講義1では、藤田弘美講師が、「中学校保健体育における武道（剣道）の学習について」と題して講義を行い、調査結果から、まず、①「中学校における剣道授業の現状」について説明し、授業時間の減少によって、最も生徒が楽しいと感じる攻防まで行きつけないことや、②「学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた剣道学習の進め方」では、ICTは有効なツールであるが使うことそのものが目的とならないよう活用方法・目的を明確にすること、③「剣道学習における主体的・対話的で深い学びの展開例」では、この目的のために、単元や題材など内容や時間のまとまりを



講義 1の様子

どのように構成するかというデザインを考えることは、まさに授業づくりそのものであり、それは子供たちのバランスある資質・能力の実現につながり、生きる力を育むものとなると説明した。

■2日目 (11月19日)

実技 1-1「剣道授業における楽しい動機付け」では、はじめに軽米満世講師が「剣道の歴史と特性」について説明し、次に、山神眞一講師による「武道的素養を培う遊びの体験」の実技研修を行い、ジャンケンゲーム、手ぬぐいゲーム、新聞切りなど、剣道の特性を楽しんで感じとらせる学習方法を実践した。



新聞切りの様子

その後、実技 1-2 では、軽米講師による「剣道に必要な動きづくり」の実技研修を行い、剣道授業は冬に行われることが多いが、すり足や踏み込み足の練習を用いることで、ウォーミングアップにもなり、運動量の確保や寒さ対策につながると説明した。

続いて、実技 2「剣道具のない授業例 1」の(1)「礼法」では、神崎浩講師が礼(禮)の意味や考え方を説明し、礼法の実践指導を行った。(2)「木刀による授業例」では、井上孝講師が「木刀による剣道基本技稽古法」基本 1～5 を示範しながら一斉に指導した。そ

の後、(3)「『木刀による剣道基本技稽古法』のグループ学習」では、藤田講師が、生徒がつまずきそうな技をどのように解決するかなど、グループによって討議して学習する方法を説明し、実践では時間が足りず、ペアでアドバイスし合う方法まで行った。



木刀による授業例

午後からの実技 3「剣道具のない授業例 2」では、花澤博夫講師と有田祐二講師が、(1)「竹刀による授業例」を指導。まず、竹刀の各部位を確認し、授業では最初に必ず竹刀に破損などがいないか、安全確認を徹底して行うことを説明し、次に基本的な竹刀の握り方や目付、構え、体さばき、足さばき、素振り、打ち方、打たせ方、間合の理解、基本打突、残身など、段階的な指導例を説明しながら実践した。

続いて、佐藤義則講師による(2)「音楽を活用した授業例」を行い、リズム剣道を紹介。音楽に合わせて基本となる技を行い、反復練習することによって基本を身に付け、特にリズムに乗って打つ楽しさを味わうことがねらいであること、また、巡回指導がしやすいことを説明。実践では単独、ペア、グループでの学習を行い、最後にグループごとに考えたリズム剣道の発表を行った。

続く実技 4「剣道具のある授業例 1」では、有田講師が(1)「剣道具の段階的着装」を、山神講師が(2)「基本となる技の段階的指導」を、軽米講師と藤田講師が(3)「ごく簡単な試合 1 判定試合(正面・小手・胴)」をそれぞれ指導した。判定試合では、知識と技能が一致することが重要で、それによって 1 本となる有効打突を生徒が意識するようになり、できたこと・できなかったことを振り返り、深い学びにもつながると説明。

実技 5「剣道具のある授業例 2」では、(1)「応じ技(抜き技:面抜き胴)」を井上講師が、(2)「ごく簡単

会場となったロート奈良武道場



な試合 2・応じ技による判定試合（面抜き胴による 3 本勝負）を神崎講師が、(3)「応じ技を用いた約束練習」を山神講師が、(4)「自由練習（攻防交代型）」を軽米講師が、(5)「簡易な試合（ポイント制）」を藤田講師が指導し、特に試合の際、受講者が中学生を演じて行うなど、楽しく取り組んでいた。



判定試合後の協議

実技研修最後の(6)「剣道具の結束」は、有田講師が説明し、全員で実践した。

2日目の最後は、藤田講師指導の下、「主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりと実践事例について」をテーマに、8つのグループに分かれて研究協



研究協議の様子

議・発表を行った。ICT の活用例と交流活動の在り方について発表し、最後に藤田講師が「こうしなければならないということはありません。いろいろな事例があります。先生方に合うものを、ぜひ実践してみてください」とまとめた。

■3日目（11月20日）

講義 2 では、有田講師が「安全指導」について講義した。事故を未然に防ぎ、学習効果を上げるためにも、安全で清潔な場（床）の確保や剣道具の点検、保守管理といった安全管理が重要であることを説明。また、熱中症予防についても言及した。

続く「体罰・暴言によらない指導」の講義 3 は、花澤講師が担当し、まず新聞記事の資料から、体罰を生む古い体質や、時代に合った指導法、アンガーマネジメントなどを取り上げ、問題提起と解決策について説明。また、調査結果から、体罰を行った者は 50 代以上が多く、固定観念に囚われて意識の転換ができていないと指摘。最後に「体罰やハラスメント行為はそれまでの社会的なキャリアを全て失うことになる。一人ひとりの人権を尊重し、強い意思をもって対応していただきたい」と述べた。

講義 4「コロナ禍の剣道授業での配慮事項及び授業例」は軽米講師が講義し、全剣連の取り組みや、実際に行っている剣道授業を映像で紹介した。

最後に全体を通しての質疑応答を行い、「剣道具一式が揃わない場合はどうすべきか」など、いくつかの質問に対し、講師陣が回答した。

閉講式では、修了証の授与の後、講師を代表して軽米講師が講評を行い、主催者挨拶を網代全日本剣道連盟会長が述べ、3日間の全日程を終了した。